

## 各論『堀江雄太氏：犬と猫』



各論の最初は、**一般財団法人クリステル・ヴィ・アンサンブル**の堀江雄太さんよりお話がありました。

「私たちの団体は設立してから3年半ほど経とうとしています。代表理事は滝川クリステルがつとめています。生物多様性保全及び犬猫の殺処分に関する啓発活動に力を入れ、イベントやワークショップを積極的に行なっています。ちょうど2ヶ月前の8月に、こちらの会場でアニマル・ウェルフェア サミットを開催し、のべ2000人の方にいらしていただくことができました。」

動物に囲まれて暮らしてきたという滝川さんはキャスター時代、動物愛護問題などの取材を通じて日本には動物にまつわる大きな問題があることを実感。生物多様性の問題も含めて活動していく団体を作りたいというモチベーションのもと、クリステル・ヴィ・アンサンブルを設立されたそうです。

「代表の滝川は東日本大震災のときに迷い犬を一時預かりしました。その後、飼い主の方は見つかったのですが事情があり引き取ることができない状況だったため、現在もその犬と引き続き暮らすなど個人的にも保護活動を行っています。」

これまで10年以上にわたって環境問題のコンサルタント業をされていた堀江さん。そこでの経験を活かすべく、クリステル・ヴィ・アンサンブルに入り活動を始められたそうです。

「団体の名前、ヴィ・アンサンブル (VIE ENSEMBLE) はフランス語で“共に人生を歩む、一緒の命”という意味を持ちます。同じ価値の命がお互いに支え合う社会、共存・共生する社会の実現を目指すことを目的としているため、このような名前になりました。“共に、生きる”をスローガンとし、言葉を直接かわすことができない動植物や自然に耳を傾けて、お互いに支えあえる社会を実現していければと考えています。」

活動内容としては、現在二つの大きなプロジェクトを進めているそうです。

「ひとつが“プロジェクト・ゼロ”になります。2020年を目標に、アニマル・ウェルフェアに則り、犬猫の殺処分ゼロを目指すものです。もうひとつは“プロジェクト・レッド”で、人間の管理下の動物ではなく、野生動物を対象としています。生態系の頂点にいる危機に瀕した野生動物の保護をして、広く生態系を守ろうとするもの

です。いずれも動物ではありますが、人の関わり方が異なる動物種を対象としています。」

## プロジェクト・ゼロとは？

2020年を目標に、犬猫の殺処分数をゼロにすることを目指すプロジェクト・ゼロでは実際にどのような活動が行われているのでしょうか。

「一つ目は、犬や猫を一時預かりするボランティアであるフォスターを増やしていこうという取り組みをしています。保護活動に参加するボランティアの方の数が少ない現状のため、2年前の2015年から“フォスター・アカデミー”を開始し、フォスターの育成や支援を行なっています。フォスター・アカデミーではドッグトレーナーや獣医師の方などを講師に招き、ペットに関するさまざまなボランティアに興味のある方を対象としたセミナーを行っています。」

フォスター・アカデミーの単発セミナーはこれまでに21回開催され、延べ800の方が受講。また、ベーシックといって、セミナーでより深く学びたいと興味を持った人を対象とした連続講習会も行なっているそうです。

「二つ目は、子猫ミルクボランティアへの支援です。これは大阪市の獣医師会で取り組んでいる子猫リレー事業への支援になります。そこでの活動は幼齢の子猫を預かり育て、そのあと高齢者の方に一時預かりをしていただき、年齢の少し若い方に譲渡するという流れになっています。子猫を通じて地域を活性化させるプロジェクトでもあり、私たちはそこに対して助成をしています。」

三つ目として、ウェルカムペットキャンペーンを行なっているそうです。

「こちらは啓発活動になります。残念ながら、犬や猫を飼う際に保護犬や保護猫を受け入れるという選択肢があることを知らない人がいまだ多いのが現状です。そこで、保護犬や保護猫の存在を少しでも社会に広めていくために、実際に保護犬や保護猫と暮らす人の体験談や、譲渡センターを紹介するといった内容の冊子を作り、冊子を通じての啓蒙活動を続けています。」

団体の活動の二本柱のもうひとつ、プロジェクト・レッド。ここでは生態系の頂点にいる危機に瀕した野生動物を救い、生態系を守ることをミッションとして、北海道にある猛禽類医学研究所と共に活動しています。

「鹿や猪の駆除において、禁止されている鉛弾を使用するハンターがいます。鉛弾が体内に残った状態で死体が放置されてしまうと、それを食べた猛禽類のオオワシやオジロワシが鉛中毒になってしまうという状況が起きているのです。このようなことが起こらないよう、鉛弾の使用禁止を求める署名活動を行なっています。また、北海道は広大ですから、いつでも緊急治療が行えるよう、企業からの支援と当財団からの寄付を通じてドクターカーを寄贈しました。」

その他に、ボルネオの森林伐採により生息地を追われるゾウやオランウータンの保護活動の一環として、アクセサリーなどを作り、その売り上げの寄付をしているそうです。

## アニマル・ウェルフェア サミットの開催

「昨年に引き続き第2回目の開催となった今年8月のアニマル・ウェルフェア サミットの開催にあたっては、アニマル・ウェルフェアを考える上で重要な5つの自由について多くの方に知っていただき、その上で私たち一人一人に何ができるのかを考える場を作りたい、という思いが根底にありました。」

そのため、今回のアニマル・ウェルフェアサミットは犬や猫だけでなく、産業動物や野生動物についての話も交えたプログラムでした。

「今回、来場者にアンケートをとりましたところ、200名ほどから回答がありました。集計結果を見ますと、参加者の8割方が女性、年代別では30代から50代の方が8割、住まいは関東地区の方がほとんどでした。職業としてはペット業界や動物病院関連の方が多く、それ以外という人は3割強くらいでした。現在動物と暮らしている人は8割強になっていました。」

これらの回答結果から、男性、若い世代、年配の世代、動物と暮らしたことがない人、そして地方に住んでいる人の参加者が少なかったことが示されます。

「そのような方々にも、科学的な知見に基づいたアニマル・ウェルフェアとはどういうものなのか？ということを理解していただくきっかけを作る必要があるのではないかと痛感しました。次回はより広い年代、地域、そして男性の方々にも興味を持ってもらえるようなプログラムづくりをしたいと思っています。」

アンケートに記載されたアニマル・ウェルフェア サミットへ参加した感想には、5つの自由を大切にしたい、その子にとってのQOLを考えることが大事、自分の飼っている動物の知識を増やすことが大事というような感想が書かれつつ、その中にはいくつかのキーワードが共通して見られることがわかりました。

「“愛情”、“責任”、“お互い・共に”、“幸せ”、“生きる”といった言葉を多くいただきました。このようなキーワードを、今後、社会の中により広めていき、しっかりと定着させていきたいと思っています。」

現実問題として、社会にアニマル・ウェルフェアへの理解を広め、深めていくにはどのようにしたら良いのでしょうか。

「まず前提として、すべての人々は直接的・間接的に人間の飼育下にある動物と関わっていることから、人間と動物が共に生きていくためには科学的知見に基づいたアニマル・ウェルフェアに対する理解を深める必要があるとしています。実際には、動物を飼っておらず、アニマル・ウェルフェアへの理解がない方が大多数かと思えますが、一方では動物と直接関わりがあり、アニマル・ウェルフェアへの理解の深い方々も確実にいます。そういった方々にインフルエンサー（影響を与える人）となっただき、動物は飼っているけれどアニマル・ウェルフェアへの理解の少ない方とのコミュニケーションをはかってもらい、インフルエンサーとなる人の数を増やし

ていければと考えています。アニマル・ウェルフェアの概念を広めていくには、社会の中でのインフルエンサーの役割がひときわ重要になると考えているからです。また、直接動物に関わっていなくとも、アニマル・ウェルフェアそのものへの理解を深めてもらえれば、そのような方々は将来の良き飼育者ともなり得ます。そして少なくとも、動物との関わりも理解もない人が、理解のないままに動物を飼うという流れだけは止めていかなくてはならないと思っています。

アニマル・ウェルフェアに対する理解を人々が深めることにより、よりよく動物と共生できるばかりでなく、動物との関わりが直接的な人と、動物が苦手な人を含めて動物との関わりが間接的な人も共存できる社会になると考えています。そのような社会を実現するために、これからも活動を続けていきたいと思っています。」